

研究報告

通所リハビリテーションおよび通所介護サービスを利用する高齢者が実施したいと望む作業について

竹内 さをり

Activities desired by elderly on ambulatory rehabilitation and ambulatory nursing care service

TAKEUCHI Saori

Abstract : One hundred and seventy six (76 males and 100 females) elderly receiving occupational therapy at 26 ambulatory rehabilitation and ambulatory nursing care facilities (hereinafter referred to as ambulatory operational facilities) nationwide were interviewed on the type of activities they desire personally. Most of the elderly desired instrumental activities of daily living, followed by artistic craft activities. On the other hand, we also found that some of them desired social recreational activities and physical sporting activities. This result suggested that for users of ambulatory operational facilities, not only activities that can be performed within the facilities, but various other activities need to be proposed. In addition, there are differences between the males and females regarding the activities they desire. Most males preferred social recreational activities while most females preferred instrumental activities of daily living. To fully grasp the activities desired by target subjects, items of activities based on gender need to be presented.

Furthermore, regarding the practice of occupational therapy in ambulatory operational facilities, from the reality that the target subjects desire various activities, not only an approach towards the aspect of physical function, but the realization of activities related to instrumental activities of daily living and social recreation must be considered.

Key Words : ambulatory rehabilitation, ambulatory nursing care service, occupation, occupational therapy

抄録：全国26か所の通所リハビリテーション事業所および通所介護事業所（以下、通所事業所）にて作業療法を行っている高齢者176名（男性76名、女性100名）を対象に、本人がしたいと望む作業について聞き取った。結果、通所事業所を利用する対象者が望む作業は、手段的日常生活活動が多く、次いで、手工芸的技術活動が多かった。一方で、社会的レクリエーション活動や身体的スポーツ活動を望む者もいることも分かった。この結果から、通所事業所の利用者に対しても屋内でできる活動のみでなく、様々な種類の作業の提案を行う必要があると考えられた。また、男女間で望む作業に違いがあり、男性は社会的レクリエーション活動を、女性は手段的日常生活活動を望む者が多かった。対象者が望む作業を把握するためには、性別に応じた作業項目を提示する必要があると考える。

さらに、通所事業所における作業療法の実践については、対象者が様々な作業を望むという実情から、身体機能面へのアプローチだけでなく、手段的日常生活活動や社会参加活動に関する作業の実現を考慮すべきであると考えられた。

キーワード：通所リハビリテーション、通所介護事業所、作業、作業療法

1. はじめに

人の生活は様々な作業で成り立っている。加齢や疾病による障害は、これまで実現できていた作業の遂行を困難にする。村井は、高齢者が主体的で積極的な生活をするうえで、加齢や疾病による心身機能の低下でできなくなった作業が、方法や工夫によってできることを知ることが大切であり、できることを知ることにより生活の意欲が高まると述べている¹⁾。また、その作業を再獲得するアプローチを受けることが、高齢者にとって積極的・活動的な生活を営むうえで重要であると述べ、対象者の望む作業に焦点を当てた介入とその効果について示している¹⁾。

Matsutsujuらは、作業療法において患者が活動を選択することは、人間の特性を弁別するものとして重要であり、選択される活動は、興味の特性に関する研究から得られた知識によりなされるべきであるとしている²⁾。

作業療法対象者の望む作業、人の営む生活作業は多種多様である。作業について、村井は「日常の身の回りの作業」、「家事などの日常生活関連動作を獲得するための作業」、「仕事などの生産的作業」、「趣味などの余暇的作業」、「地域活動などの作業」に分類している¹⁾。また、Matsutsujuは患者が興味を示す活動を作業療法で提供することを目的とした、神経精神研究所(Neruropsychiatric Institute; NPI)興味チェックリストを1969年に作成し、作業を「手工芸的および技術的活動」「身体的およびスポーツ的活動」「社会的およびレクリエーション的活動」「教育的および文化的活動」「日常生活活動」の5つのグループに分類している²⁾。また、山田は原版の興味チェックリストを改編し、日本版の高齢者版興味チェックリストとして、高齢者が望む作業を「手工芸的技術的活動」1項目、「身体的スポーツ活動」5項目、「社会的レクリエーション活動」13項目、「教育的文化的活動」5項目、「日常生活活動」5項目に分類している³⁾。一方で、山田はこの高齢者版興味チェックリストは、地域に限定した活動や対象の属性に応じた活動が含まれており、各地域での活用や、異なる対象での活用による効果の検証が、必要といった課題があるとしている³⁾。

これらのことから、作業療法が対象とする様々な分野において、対象者が望む作業や対象者の属性、地域特性に応じた作業を知ることは、作業療法実践のうえで重要であると考えられる。

今回、通所リハビリテーションおよび通所介護において、対象者が望む作業の聞き取り調査を行なった。本研究の目的は、通所系サービスを利用する高齢者の望む作業を明らかにし、作業療法実践の一助とすることである。

2. 方法

1) 対象

対象は、平成21年度厚生労働省老人保健健康増進等事業「自立支援に向けた包括マネジメントによる総合的なサービスモデル調査研究事業・通所リハビリテーション検証事業」および平成22年度「包括マネジメントを活用した総合サービスモデルのあり方研究事業・通所事業利用者の地域参加に関する調査研究事業」(以下、研究事業)に協力を行った全国26か所の通所リハビリテーション事業所および通所介護事業所(以下、通所事業所)を利用し、作業療法を実施している者176名(男性76名、女性100名)、平均年齢75.0±9.8歳であった。協力施設は、研究事業の実施時に、社団法人日本作業療法士協会から公募し、応募のあった通所事業所である。

属性項目として、年齢、性別、介護度、痴呆性老人の日常生活自立度(以下、認知症自立度)について調査した。

2) 方法

研究事業において、生活行為向上マネジメントを活用した介入を行ない、その際、対象者から望んでいる作業について聞き取りを行った。

聞き取りの方法は、対象者に「あなたが困っている、または問題を感じている事柄で、良くなりたい、改善してみたいと思う事柄がありましたら3つほど教えてください」と口頭で伝えるかたちで行った。対象者への聞き取りは、事前に聞き取り方法について研修を受けた作業療法士が行った。

調査期間は、平成21年度は平成21年9月1日～10月31日、平成22年度は平成22年9月22日～10月31日である。

3) 解析方法

対象者から聞き取った望む作業を、山田の高齢者版興味チェックリストのカテゴリー別活動³⁾である6項目に分類した。また、カテゴリー別活動を、性別、介護度、認知症自立度別に分類し、分析を行った。統計

解析は、クラスカル・ウォリス検定を用い、有意水準は危険率5%未満とした。

4) 倫理的配慮

本研究は、社団法人日本作業療法士協会の倫理規定に基づき実施した。実施にあたり、対象者・家族に対し、研究の目的、事例報告の方法、利用範囲、取りやめの自由、人権擁護個人情報保護などを記載した書面で説明を行い、同意を得た。

3. 結果

1) 対象者の属性

対象者176人の年齢、性別、介護度および認知症別内訳を表1に示す。介護度の内訳は、要介護2が55名(31.5%)と最も多く、次いで要支援2が35名(19.8%)、要介護3が28名(15.9%)、要介護1が27名(15.3%)、要支援1が25名(14.2%)の順であった。また、介護度が重度である要介護4は4名(2.2%)、要介護5は2名(1.1%)と少なかった。認知症

自立度では、正常が100名(56.8%)、Iが42名(23.8%)と対象者の約8割は、認知面に大きな問題がなかった。

2) 目標活動の種類と内訳

対象者が望むとしてあげた作業は、1人につき1~4個であった(平成1.93個)。対象者176名があげた望む作業は、134種類(複数回答)あった。

(1) カテゴリー別活動の分類結果

目標としてあげられた作業を、山田の高齢者版興味チェックリストのカテゴリー別活動に分類した³⁾。結果、日常生活活動に分類される作業項目が54項目あり、そのうち基本的日常生活活動に分類される作業項目は23項目(表2)、手段の日常生活活動に分類される作業項目は31項目であった(表3)。手工芸的技術的活動に分類される作業項目は26項目(表4)、身体的スポーツ活動に分類される作業項目は17項目(表5)、社会的レクリエーション活動に分類される作業項目は29項目(表6)、教育的文化的活動に分類される作業項目は5項目(表7)であった。

カテゴリー別活動において選択者が最も多かった分

表1 年齢別性別と介護度別、認知症自立度別対象者数 (人)

		65歳未満	65~74歳	75~84歳	85歳以上	合計
性別	男性	17(9.6%)	22(12.5%)	31(17.6%)	6(3.4%)	76(43.2%)
	女性	11(6.2%)	20(11.3%)	48(27.2%)	21(11.9%)	100(56.8%)
介護度	要支援 1	4(2.2%)	8(4.5%)	10(5.6%)	3(1.7%)	25(14.2%)
	要支援 2	2(1.1%)	8(4.5%)	16(9.0%)	9(5.1%)	35(19.8%)
	要介護 1	3(1.7%)	3(1.7%)	15(8.5%)	6(3.4%)	27(15.3%)
	要介護 2	13(7.3%)	10(5.6%)	26(14.7%)	6(3.4%)	55(31.5%)
	要介護 3	6(3.4%)	12(6.8%)	8(4.5%)	2(1.1%)	28(15.9%)
認知症自立度	4	0	1(0.5%)	3(1.7%)	0	4(2.2%)
	5	0	0	1(0.5%)	1(0.5%)	2(1.1%)
	正常	22(12.5%)	30(17.0%)	38(21.5%)	10(5.6%)	100(56.8%)
	I	3(1.7%)	5(2.8%)	22(12.5%)	12(6.8%)	42(23.8%)
IIa	IIa	2(1.1%)	4(2.2%)	11(6.2%)	2(1.1%)	19(10.7%)
	IIb	0	2(1.1%)	4(2.2%)	2(1.1%)	8(4.5%)
	III	1(0.5%)	1(0.5%)	4(2.2%)	1(0.5%)	7(3.9%)
合計		28(15.9%)	42(23.8%)	79(44.8%)	27(15.3%)	176(100%)

表2 基本的日常生活活動に分類される作業項目 (人)

作業内容	合計	性別		作業内容	合計	性別		作業内容	合計	性別	
		M	F			M	F			M	F
歩行	13	5	8	洗体	2	2		スムーズに話す	1	1	
排泄動作	6	2	4	外を歩く	1	1		声が大きくなる	1		1
衣服の着脱	4		4	坂道歩行	1		1	普通食を食べる	1		1
入浴動作	4	1	3	横断歩道を渡る	1	1		ADLのスピードアップ	1	1	
立ち上がり動作	3	1	2	信号を渡る	1	1		朝スムーズに動ける	1		1
爪きり	2	2		ものの固定	1		1	自分のことができる	1		1
ボタン、ファスナーをとめる	2	2		2階で生活する	1		1	現状の生活維持	1		1
階段昇降	2	2		左手の使用	1	1					
23項目									52	23	29

表3 手段的日常生活活動に分類される作業項目

(人)

作業内容	合計	性別		作業内容	合計	性別		作業内容	合計	性別	
		M	F			M	F			M	F
料理	27	4	23	針仕事	3	1	2	ペットボトルの蓋をあける	1		1
買い物	21	6	15	草むしり	3		3	布団の上げ下ろし	1	1	
外出	13	6	7	ラーメン屋へ行く	2	2		カーテンを洗う	1		
畑仕事	8	2	6	病院受診	2	2		2階の窓の開閉	1		
パソコン	6	6		車の運転	2	1	1	新聞の荷造り	1		
洗濯・物干し	6	1	5	物の運搬	2	1	1	電話しながらメモを取る	1	1	
電車・バスの利用	4	1	3	台所作業	2		2	庭の手入れ	1	1	
家事	4		4	料理の運搬	2		2	仕事	1	1	
外食	3	1	2	食器の運搬	1	1		集会所の階段昇降	1		
書字	3	1	2	鍋の用意	1		1	理容室での髭剃り	1	1	
植木の手入れ	3	2	1								
								31項目	128	42	86

表4 手工芸的技術的活動に分類される作業項目

(人)

作業内容	合計	性別		作業内容	合計	性別		作業内容	合計	性別	
		M	F			M	F			M	F
書道	9	3	6	絵画	1	1		刺し子	1		
編み物	5		5	ちりめん細工	1		1	手工芸	1		
ミシン	3		3	ネット手芸	1	1		水彩画	1	1	
手作業	3	1	2	ビーズクラフト	1	1	1	茶道	1	1	
パッチワーク	2		2	フラワーデザイン	1	1		日曜大工	1	1	
洋裁	2		2	メタリックヤーン手芸	1	1		風景画	1	1	
和裁	2		2	モチーフを編む	1		1	墨絵	1		
Xmas ブーツを作る	1		1	鉛筆画	1	1		木目込み手芸	1	1	
アンダリア	1		1	刻字	1	1					
								26項目	45	11	34

表5 身体的スポーツ活動に分類される作業項目

(人)

作業内容	合計	性別		作業内容	合計	性別		作業内容	合計	性別	
		M	F			M	F			M	F
散歩	22	16	6	ボーリング	1	1		卓球	1		
キャッチボール	1	1		健康器具を使う	1	1		釣り	2	2	
グランドゴルフ	3	1	2	山菜取り	1	1		登山	2	1	
ゴルフ	2	2		水泳	2	2		野球	1	1	
ダンス	1	1		体操	1		1	パークゴルフ	1	1	
バトミントン	1	1		体力向上	1		1				
								17項目	43	32	12

表6 社会的レクリエーション活動に分類される作業項目

(人)

作業内容	合計	性別		作業内容	合計	性別		作業内容	合計	性別	
		M	F			M	F			M	F
旅行	11	7	4	カメラの操作	2	2		種まき	1		
園芸	7	3	4	老人会に参加	2	1	1	孫と話す	1	1	
犬の散歩	5	4	1	他の人にアドバイスする	1	1		孫に会いに行く	1	1	
友人に会う	3		3	カラオケに行く	1		1	孫の試合観戦	1	1	
コーラス	2	1	1	そばうち	1		1	庭木の剪定	1	1	
温泉	2	1	1	囲碁・将棋	1	1		土いじり	1	1	
詩吟	2	1	1	犬の餌やり	1	1		盆栽	1	1	
写真撮影	2	2		個展を開く	1	1		野菜づくり	1	1	
食事会	2	1	1	山野草の世話	1		1	麻雀	1	1	
同窓会へ参加	2	2		思い出話	1	1					
								29項目	58	26	23

類は、手段的日常生活活動が128人であり、次いで社会的レクリエーション活動が58人、基本的日常生活活動52人、手工芸的技術的活動45人、身体的スポーツ活動43人、教育的文化的活動8人の順であった(表8)。また、実人数で見ると、手段的日常生活活動(84人)が最も多く、次いで社会的レクリエーション活動(50人)、身体的スポーツ活動(37人)の順であった(表8)。

表7 教育的文化的活動に分類される作業項目(人)

作業内容	合計	性別	
		M	F
ボランティア	3		3
絵手紙	2		2
古民家見学	1	1	
図書館で本を探す	1		1
読書	1	1	
5項目	8	2	6

(2) 性別別作業項目の特徴(表8)

男性が目標としてあげた作業項目数をカテゴリー別活動で見ると、基本的日常生活活動14項目、手段的日常生活活動20項目、手工芸的技術的活動9項目、身体的スポーツ活動14項目、社会的レクリエーション活動22項目、教育的文化的活動2項目であった。女性が目標としてあげた作業をカテゴリー別活動で見ると、基本的日常生活活動13項目、手段的日常生活活動23項目、手工芸的技術的活動19項目、身体的スポーツ活動6項目、社会的レクリエーション活動15項目、教育的文化的活動3項目であった。

各作業を選んだ人数では、男性では、散歩が16人と最も多く、次いで旅行7人、買い物、外出、パソコンがそれぞれ6人の順であった。女性では、料理(詳細な目標も含む)23人、買い物15人、歩行8人、外出7人、畑仕事、書道、散歩がそれぞれ6人という結果であった。

表8 カテゴリー別活動の選択者数および性別別選択作業項目数

作業カテゴリー	選択者数(人) (複数選択)	実人数 (人)	選択作業項目数(項目)	
			男性	女性
基本的日常生活活動	52	35	14	13
手段的日常生活活動	128	84	20	23
手工芸的技術的活動	45	36	9	19
身体的スポーツ活動	43	37	14	6
社会的レクリエーション活動	58	50	22	15
教育的文化的活動	8	8	2	2

表9 各カテゴリー別活動の性別、介護度別、認知症自立度別選択者数

		カテゴリー別選択者数(複数選択)(人)						χ ² 二乗値	p 値
		基本的ADL	IADL	手工芸的技術的活動	身体的スポーツ	社会的レクリエーション	教育的文化的活動		
性別	女性	29	86	34	12	23	6	36.32	<0.05
	男性	23	42	11	32	36	2		
年齢	65歳未満	15	24	7	8	4	1	4.87	n.s
	65~74歳	11	33	9	10	22	2		
	75~84歳	22	48	22	17	27	2		
	85歳以上	4	23	7	9	6	3		
介護度	要支援1	8	19	3	6	9	0	2.59	n.s
	要支援2	7	29	7	11	17	3		
	要介護1	6	10	11	7	6	2		
	要介護2	22	38	18	13	18	2		
	要介護3	8	29	5	5	6	1		
	要介護4	0	1	1	2	3	0		
要介護5	1	2	0	0	0	0			
認知症自立度	正常	30	78	23	23	40	5	3.21	n.s
	I	10	28	14	14	10	1		
	IIa	11	15	4	3	7	1		
	IIb	1	4	3	1	2	0		
	III	0	3	1	3	0	1		

Kruskal Wallis 検定結果
n.s：有意差なし

(3) 属性別作業項目の特徴

年齢別、介護度別、認知症自立度別のカテゴリー別活動の選択者数を表9に示す。性別を含むこれら属性と、カテゴリー別活動の選択者数との関係について、クラスカル・ウォリス検定を用いて統計学的解析を行った。結果、対象者が選択した活動は、性別 (χ^2 乗 = 36.32, $p=0.00$) に有意な差を認めしたが、年齢 (χ^2 乗 = 4.87, $p=0.43$)、介護度 (χ^2 乗 = 2.59, $p=0.76$)、認知症自立度 (χ^2 乗 = 3.21, $p=0.67$) には有意差は認められなかった。

4. 考 察

以上の結果から、通所事業を利用する高齢者の望む作業の特徴、および作業療法の実践において、次のことを考慮すべきと考えられる。

1) カテゴリー別分類の特徴から

今回の調査により、通所事業利用者の望む作業は、手段的日常生活活動が最も多く、次いで手工芸的技術的活動、および社会的レクリエーション活動が多いことが分かった。山田が行なった高齢者版興味チェックリストによる、高齢者が興味をもつ作業についての調査では、社会的レクリエーション活動の項目が最も多かった³⁾。この違いは、山田の調査対象者が、老人大学参加者などの通常の生活を送る健常高齢者であり、本研究の対象者は、通所事業対象者すなわち虚弱、および障害高齢者であるという心身状況の違いによるものではないかと考えられる。しかし、介護度や認知症自立度とカテゴリー別活動の選択者数との関係については、統計的な有意差は認められなかった。また、聞き取り方という点で、本研究では、対象者が望む作業を自由に返答するかたちで聞き取っているが、山田の研究では高齢者が選びやすいよう項目数を必要最低限に絞り、活動を選択するかたちで聞き取っている点の違いによるものとも考えられる。この点についても、具体的に根拠を示す結果とならなかった。以上の点は、今後の検討課題としたい。

いずれにせよ今回の結果から、通所事業対象者の望む作業は、より日常に近い手段的な日常生活活動であることが分かった。また、社会参加に相当する社会的レクリエーション活動に加えて、室内でできる手工芸的技術的活動のニーズが高いことも分かった。この結果は、対象者が虚弱、障害高齢者であることから、自らのできる作業を見積もって回答していることも考え

られる。一方で、社会的レクリエーション活動や身体的スポーツ活動を望む対象者もいることから、通所事業利用者は屋内活動を望むと思いつくことなく、様々な作業について提案する必要があると考える。

2) 性別による望む作業の違いから

性別によるカテゴリー別活動の選択結果では、男性は、社会的レクリエーション活動を望む者が最も多く、次いで手段的日常生活活動、身体的スポーツ活動および基本的日常生活活動の順に多く選択していた。女性では、手段的日常生活活動が最も多く、次いで手工芸的技術的活動、社会的レクリエーション活動を多く選択していることが分かった。また、各作業でみると男性は散歩が最も多く、次いで旅行であった。女性では、料理、買い物、歩行の順であった。これら性別によるカテゴリー別活動の選択については、統計的に有意差を認める結果となった。以上の結果から、対象者の望む作業を知るうえでは、男女間で望む作業項目の違いがあり、作業選択時には、性別に応じた作業の提示が必要であると言える。

また、女性は料理を希望するものが多く、23%が料理を望む作業としてあげた。この結果は、われわれ作業療法士がアプローチを行う際、女性にとっての料理の重要性を理解し、料理の実現に向けた介入が重要であることを示唆していると言える。

一方で、料理の実現に対して、高齢者の場合は嫁への役割交代、障害を有した場合には、危険を案じる家族の反対により、役割を担えないといった課題もある。土井は、家庭内で一度役割を喪失してしまった高齢者が、家事を行ううえで重要なことは、動作や活動の自立ではなく、家庭や施設等所属する集団でその行為が役割として定着し、期待されることであるとしている⁴⁾。対象者が望む「料理」といった作業を実現するには、家で行う前に、専門的な支援が受けられる通所事業所といった場で料理活動を行い、本人ができることを見極める。同時に、困難な点を把握し、支援策を検討したうえで、本人も支援を経験する。こうして通所事業所内で実現できた結果を、家での実行へとつなぐことで、家での料理の実現にもつながると考える。今回の結果から、通所事業において作業の実行の必要性や、通所事業所での介入は、本人に対してのみではなく、家族に対しても必要であることを知る機会となった。

3) 通所事業における作業療法の実践について

通所事業における作業療法の役割は、心身機能や生活機能の維持・向上を目的とした個別リハビリテーションと社会交流や参加を促すことが重要である⁵⁾とされている。しかし、現状の通所事業所における作業療法場面では、身体機能面へのアプローチに取り組む時間が多く、手段的日常生活活動や社会参加を促す活動に取り組む時間が、ほとんど取れていないといった現状がある⁶⁾。その理由は、通所事業対象者が身体機能面へのアプローチを望んでいるためとされている⁶⁾。しかし、今回の結果から、通所事業対象者も手段的日常生活活動や、社会参加活動に関する作業の実現を望んでいることが分かった。この結果は、通所事業における作業療法の実践において、対象者の望む作業を聞き取ることの必要性について、改めて示す機会になったと考える。

また、作業療法の本来の専門性である、作業を重視したアプローチの必要性についても、改めて考える機会になった。

5. おわりに

今回、通所事業利用者について、望む作業の聞き取りを行った。その結果から、通所事業利用者の望む作業として、手段的日常生活活動や社会参加活動に視点を向けることの必要性を示した。また、今回の調査から、対象者が望む作業は非常に多岐に渡ることが分か

った。これら結果から、個々の対象者が、望む作業を聞き取る機会を持つことの重要性について、改めて感じる機会を得ることができた。

本論では、カテゴリー別活動および性別別の作業選択結果を示したが、今後は、地域的な特徴についての検証も必要であると考ええる。

本研究を機に、今後も引き続き作業療法に関わる様々な対象者が望む作業について、検討していきたいと考える。

引用文献

- 1) 村井千賀, 岩瀬義昭, 能登真一他: 平成 21 年度老人保健健康増進等事業. 自立生活に向けた包括マネジメントによる総合的なサービスモデル調査研究報告書. 社団法人日本作業療法士協会 2010: 1-11
- 2) Matsutsuyu J, S. 山田孝: 興味チェックリスト. *Japanese Journal Occupational Behavior* 1997; 4(1): 32-38
- 3) 山田孝, 石井良和, 長谷龍太郎: 高齢者版興味チェックリストの作成. *作業行動研究* 2002; 6(1): 25-35
- 4) 土井勝幸, 小野咲子, 高橋希: 介護老人保健施設における家事技能支援. *作業療法ジャーナル* 2007; 41(7): 715-718
- 5) 酒井陽子: 通所リハビリテーションと作業療法. 山田孝・編, 高齢期障害領域の作業療法. 中央法規 2010: 134-137
- 6) 村井千賀, 岩瀬義昭, 能登真一他: 平成 22 年度老人保健健康増進等事業. 包括マネジメントを活用した総合サービスモデルのあり方研究事業報告書. 社団法人日本作業療法士協会 2011: 148-188